

The memory leaves you for photography – 大森克己の *sounds and things 2*

スナップショットを論じる言説は救いようもなく画一的である。「世界が見慣れない表情を見せた一瞬を切り取る・・・」「何気ない日常がふと、あるがままの瑞々しい輝きを取り戻す・・・」「凡庸な現実のなかに立ち現れるシュールな光景・・・」等々。これだけ抽出して並べると馬鹿みたい（「世界が世界する！」）だが、誰でも少しくらいは「眼に見えぬ存在世界の輝き」に、あるいは「他者」に「外部」に、「不意撃ち」されたいという自分勝手な妄想を飼っている。

機械であるカメラは世界を写すだけで、「見る」わけではない。それゆえ周知のように写真は、人間の視覚に汚される以前の、世界のあるがままの姿を写し出すかのように信じられた。無論、特定のフレームを選択し、シャッターの開閉によって一定の短い時間を切り取ることでカメラは世界を変形するのだが、それも、世界をその無垢の姿へと戻すためなのであった。こうして写真は、我々の妄想を満たす恰好のメディウムでありつづけ、写真を撮る者は、まさに妄想の純粹実現へ向けてカメラの諸条件を設定し、写真を見る者は、「私」から最も遠い場所で立ち現れた「あるがまま」の写真をつねに選んできたのである。

しかし、すべての思考可能なものの外部としての他者や外部は、定義からして、「私」がぎりぎり思考する他者や外部とは異なる。だから「私」が思い描くあらゆる「あるがまま」の「他者」と「外部」は、本当の他者と外部から見れば一方的で都合の良い妄想に他ならない。

スナップショットは、この切ないギャップと、そこから滲み出る恥のユーモアを養分とする。切ない、なぜなら「私」は他者／世界と自己のあいだに境界線を引く限りで存在できるのに、それが私の引いた境界線にすぎない以上、その線の彼方に「他者」はいないからである。恥、なぜなら私が見たと信じた「世界」や「他者」は、「あるがまま」であるどころか、せいぜい自分の存在を盲滅法に世界に押しつけた痕跡、寝乱れた跡のようなものに過ぎなかったからである。

以上の話は、各々の「私」から見た写真の本質であるが、写真の奇妙な力は、まるで自由間接文体の文章を頭のなかで読むように、一人の「私」が自己の「外部」と信じて撮った写真が、それを見る別の「私」に同じような（同じではない）切なさや恥を感じさせることである。それは感情移入ではない。むしろ他者のネガに漠然と重なることによって、一時的ではあれ、あの境界線が消える事態である。「写真はいつも戸外にある。それは自分の外へ出る方法だ¹。」

写真に確たる意味はないが、写真は無意味ではない。優れた写真を満たしているのは、意味と無意味の両方に対立するものとしてのナンセンスなのである。私の内／外の区別が、他者にとってはナンセンスだということ、しかしそれゆえ私と他者は知らずに重なり合っていること、「この世界には目にみえないものや写真に写らないことがたくさんある」（大森克己）とは、そういう

¹ Garry Winogrand *Public Relations* (New York: MoMA, 1977), p.12.

他者が普通に存在しているというユーモアなのだ。スナップシューターの才能とは、「不意撃ち」の「一瞬」を捉える運動神経ではなく、意味を撥ね返し空虚に背を向ける、この充実したナンセンスを維持するバランス感覚である。大森克己の新作を見た人は、この充実したナンセンスこそ、同時代という時空間の別名であることに気がつくだろう。

*

「sounds and things」は、311 / Fukushima という未だに終わらないカタストロフを抱えた現在の日本ないし日本人を主題としたスナップショットのシリーズである。一定のリズムで回帰する 2011 年浦安市の液状化した「うちの近所」、そして 2011 年の「福島県広野町」や「爆心地」周辺の福島県の地名を見れば、本展もまた「311 以後」という徴の下にある。しかしその上で大森のバランス感覚は、別の座標（石に刻まれた文字二つ：コルサバッド出土の楔形文字碑文と 2008 年金融恐慌の引き金を引いたあの銀行）や、別の地名（カンボジア、パリ、台北・・・）、写真史（『アメリカ人』「on the road」）や文学（『われらが歌う時』）、芸能（柳家喬太郎）、謎かけのようなキャプション（「果無集落」「ここはメンフィスではない」）を次々と導入し、写真が特定の意味に落ちようとするれば、別の意味や無意味で、あるいは画面効果や構図でバランスを取り、観客が意味の真空に没入しようとするれば、明白な意味でバランスを取り、日本社会の「終わらない日常」がついに崩壊する予感に、神経を尖らせ、無力感を覚えながら、それでも生きて行くためには、とにかく飛び続け泳ぎ続けるしかない、「鳥と魚は恋に落ちることが出来るのか？」

清水 穰（写真評論家）